

曲目解説

Adagio

アダージョ

Johann Sebastian Bach（1685–1750）　ヨハン・ゼバスティアン・バッハ

曲目解説

Adagio アダージョ

Sonata No. 1 in g minor for Solo Violin, BWV 1001 ／ 無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第1番 ト短調 より 第1楽章

Johann Sebastian Bach（1685–1750） ヨハン・ゼバスティアン・バッハ

作曲	1720年までに（ケーテン時代）
原曲の編成	ヴァイオリン1本（無伴奏）
調・拍子	ト短調・4分の4拍子。全22小節、演奏にはおよそ4分かかる
この楽譜	Mutopia Project（Hajo Dezelski 浄書、CC BY-SA 3.0）の楽譜の、 いちばん上の旋律に篠笛の運指を付記

作曲者

ヨハン・ゼバスティアン・バッハは、ドイツ中部のアイゼナハに、代々音楽家を出した家に生まれました。ヴァイマルの宮廷オルガニスト、ケーテンの宮廷楽長を経て、1723年からはライプツィヒの聖トーマス教会のカントル（音楽監督）を務め、その地で生涯を終えました。

ケーテンの宮廷（1717〜23年）は、礼拝に手の込んだ音楽を用いない改革派の宮廷だったため、バッハはこの時期、器楽曲に力を注ぎました。無伴奏ヴァイオリンや無伴奏チェロのための曲、『ブランデンブルク協奏曲』、『平均律クラヴィーア曲集』第1巻などは、この時期に生まれています。

生前は、作曲家としてよりも、オルガンの名手として知られていました。没後はしばらく忘れられましたが、1829年にメンデルスゾーンが『マタイ受難曲』を蘇演したことをきっかけに、19世紀に再評価が進みました。

曲の成り立ち

1720年にケーテンで清書された自筆譜『伴奏の低音なしの、ヴァイオリンのための6つの独奏曲』（Sei Solo à Violino senza Basso accompagnato）に収められた曲です。ソナタ3曲とパルティータ3曲が交互に並び、重音や分散和音を使って、1本のヴァイオリンで旋律と和声の両方を表すように書かれています。

ソナタ第1番は、遅い・速い・遅い・速いの順に4つの楽章を並べた、教会ソナタの形で書かれています（アダージョ、フーガ、シチリアーナ、プレスト）。このアダージョは6曲全体の最初の楽章で、自筆譜の最初のページに書かれています。自筆譜は、バッハの清書の中でも、とりわけ整った美しい筆跡で知られています。

ト短調の曲ですが、自筆譜では調号を♭1つで書き、もう1つの♭（ミ）は、そのつど臨時記号で書いています。古い教会旋法の書き方が残っていた時代の習慣で、この楽譜もそれにならっています。

曲調と聴きどころ

拍の頭に重音の和音を置き、その間を32分音符や64分音符の細かな旋律が、即興のように流れていきます。当時、遅い楽章では、奏者が旋律に即興で飾りを加えるのが普通でしたが、バッハはその飾りまで、すべて音符で書き込んでいます。

笛では和音は吹けないので、いちばん上で鳴っている旋律に運指を付けました。細かな音符は、拍の頭の音をはっきりと、その間の音は流れるように軽く吹くと、旋律の骨組みが聞こえてきます。急がず、息の流れの中で、ひとつの長い歌として吹いてください。

曲の流れ

部分	内容
はじまり	ト短調の主和音を響かせ、その上から、細かな音が流れ下りる。この始まり方が、曲全体の性格を決めている
中ほど	和音と細かな走句をくり返しながら、♭の多い遠い調へと深く入り込んでいく。拍の頭の和音の、低い音の動きをたどると、調の移り変わりがわかる
終わり	ふたたびト短調に戻り、フェルマータの付いたト短調の和音で、静かに閉じる。このあと、同じト短調のフーガが続く

音楽のしくみ （かんたんな音楽理論）

調　ト短調

ソを主音とする短調。いまの書き方では調号は♭が2つ（シとミ）ですが、この曲は自筆譜にならって♭1つで書き、ミの♭はそのつど臨時記号で付けています。

拍子　4分の4拍子

1小節に4分音符が4つ。とてもゆっくりなので、8分音符を1拍と感じて数えると、細かな音符の位置がつかみやすくなります。

書き込まれた即興の飾り

細かな音符の多くは、旋律に付けた飾りです。拍の頭の音（多くは和音のいちばん上の音）を結んでいくと、ゆったりした元の旋律が見えてきます。

篠笛の楽譜と調について

同じ曲を、全体の高さを同じ幅だけ上げ下げして書き直すことを「移調」といいます。篠笛は1本ごとに高さが違うので、笛に合わせて調を選ぶと、無理のない指づかいで吹けます。チューナーの「基準 A」は、ラの音を何ヘルツに合わせるかのことで、ふつうは 440Hz です。笛に合わせて伴奏の基準を少し下げると、笛を無理にカらずに音程がそろいます。

楽譜	内容
標準の運指版	ト短調（原調）。運指は「一＝ド」として付けています。笛だけで吹くなら、何本調子の笛でも同じ指で吹けます（鳴る高さは笛によって変わります）。
六本調子版	六本調子（古典調）の笛のための楽譜です。ヘ短調（原曲より短7度上）、チューナーの基準A＝431Hz（全体を45セント低く）。実測した六本調子の笛で、×の運指やメリ・カリがいちばん少なく吹ける調を選び、音ごとのメリ・カリの量も書いています（笛によって前後します）。

藤舎名玄　2026